

かくれんぼ

後藤 順

駅からの帰り道
八幡の藪知らず裏を抜けるとき
ふと立ち止まり
心に蘇る
少年だった記憶

あれから僕たちは
この街で歳を重ねてきた
いく十もの季節を見おくつても
ヤスオの姿がない
僕はまだ鬼のままにいる

あの日
不気味に赤々と燃えた
夕陽が西の空を染め
北の方から吹きつける風は
なまぐさい生き物の臭いがした

町は大きく変わったけれど
どこか路地裏を歩けば
小さな声で
くりかえしヤスオを呼ぶ
「もうかくれんぼは終わったよ」

「かくれババアが来るぞ」
かくれんぼの鬼の僕は
みんなを脅す
電柱やごみ箱や郵便ポストの陰に
かくれた悪童たち

ここは
市川市八幡の藪知らず
千葉街道沿いの市役所の斜め前
ヤスオはこのどこかで
息をひそめて待っているのか

みんな見つけたつもりだった
だれかが行った
「ヤスオがいない」
鼻水をたらしたのろまなヤスオ
いじめられた子のヤスオ

日が暮れてからも
みんなで声を張りあげて
ヤスオを捜したけれど
次の日もその次の日も
家にも学校にも姿をあらわさない